秋田県立博物館研究報告　第11号　93―100ページ　1986年３月

蓑虫山人の作画の様式と態度

太　田　和　夫*

Ⅰ　はじめに

岐阜県出身の日本画家蓑虫(本名土岐源吾)[1]は，生涯の大半を旅に明け暮れた。その旅は，写生修行と各地の考古遺物収集を主目的としている。

明治10年代から同20年代にかけ，彼は東北地方に滞在した。秋田県では，明治20年代に最も多く彼の足跡が認められる。

県内における蓑虫の研究は，故高橋嘉右衛門氏，写真家山田福男氏らの調査によって既になされている。高橋著「蓑虫山人」，山田共著「蓑虫山人絵日記」により，われわれは蓑虫のおいたちや作品にふれる機会に恵まれている。

秋田県立博物館の美術部門展示では，昭和60年蓑虫山人展を行なった。この展示は、絵画作品数約30件の小規模なものだったが，この準備に際し筆者は，ごく一部であろうが，県内遺存の蓑虫の作品に接見する機会を持った。この時，筆者は，蓑虫の作風が南画様式をもつという通説には肯いたものの，果してそれだけであろうかという疑問を抱いた。そこで，筆者は，蓑虫の作品には，他の様式あるいは近代画家としての要素があるのではないかという意識をもち，作品内容の検討を試みる次第である。

Ⅱ作品解説では，20件の作品の技法や構成の特徴を述べる。作品の選択に際しては，人物・風景・風俗など各種の画題の作品・作画上の特色が他の作品より極だっていることに留意した。Ⅲまとめでは，Ⅱの解説をもとに，画題・描線・色彩・様式の諸点から，若干の考察を試みる。

Ⅱ　作品解説

(1)寒山拾得図　紙本墨画掛幅装 176.8×89.4(cm.タテ.ヨコ)

この図は，蓑虫の掛幅装作品中，最大に類する。寒山拾得の図は，この外にも散見され，得意としたモティーフである。技法の特色は，毛筆に淡墨を多量に含ませ，一気に人物の形体を描き上げたところにある。さらに，濃淡を帯びた墨の線というよりは，色面によって人物の形体を表わす筆法は，他の人物にもみられるものである。款記蓑蟲山人・印章白文正方印蓑虫。

(2)寒山拾得図　紙本墨画淡彩掛幅装　135.0×68.4

(1)の作品との相違点は，寒山と拾得の左右の位置，経巻の広げ方，淡彩を施していることなどの構成と賦彩に関してである。近似点は，水墨による筆法である。款記蓑虫山人・印章白文正方印蓑虫。

(3)鍾馗図　紙本墨画淡彩掛幅装　174.0×86.4

この図は，(1)・(2)の作品と筆法において同系列にある。墨色を主調にし，顔面に岱赭・衣服の一部に青色（白群か）を淡彩で賦彩している。墨のにじみが，(1)と(2)よりも多く，礬水引を強く施さない紙に描かれたものである。固い輪郭線を用いず，濃淡の墨色でとらえられた鍾馗像は，従来の魔除のいかめしい人物像とは違う。むしろ柔和な鍾馗像となっていて，蓑虫の独自の解釈によって描かれている。款記蓑虫山人・印章白文正方印蓑虫。

(4)達磨図　紙本墨画淡彩掛幅装　150.2×82.3

この図は，水墨を大胆に用い，顔面に岱赭を施す方法において，前記の人物図に共通する。しかし，最小限の筆致で人物像を描写しているところは違っている。この極端に省略された描法は，かえって表現を強くし，蓑虫の意図的な達磨像となっている。(1)～(4)の人物図は，古来から日本画の好画題であるが，いずれも省略化・変形によって，蓑虫の創作性が認められる。款記蓑虫山人・印章白文正方印蓑虫。

(5)百老之図　紙本淡彩掛幅装　160.3×96.7

*秋田県立博物館

この図は，「百老之図　明治十四年秋日」の画題と制作年が明記されている。画中の寿老人の行列は壮観の呈をなすが，筆法上は，背景の山水描写に蓑虫の主眼が置かれている。前記人物図に顕著である水墨の技法，岩山の構成，草木の配置など破綻のない山水図となっている。色彩は，墨色が主体で，岱赭・青色系（白群か）・緑色系の三種がみられる。款記蓑蟲・印章白文正方印蓑虫。

(6)高砂之図　紙本墨画淡彩双幅　160.8×46.3

この図は，箒と熊手を１幅ずつに描きわけただけのものである。本来であれば，箒を持つ姥と熊手を持つ尉が松を背に描かれるものだが，蓑虫は人物と背景を大胆に省いて象徴化した描き方をしている。筆法は，両幅ともに勢いのある運筆と色彩のにじみの効果が特筆される。右幅款記六十六庵主蓑蟲山人・印章朱文長方印尚義の二顆。左幅款記明治二十七年十月三十日蓑虫　印章は右幅に同じ。

(7)青砥藤綱銭拾い之図　紙本墨画淡彩掛幅装　156.8×89.5

主題は，青砥藤綱にまつわる教訓的な図であるが，描法の上では，人物以外の樹木に蓑虫の特色がみられる。樹木の葉の筆致に，南画に特有の点葉法や夾葉法が多用されている。この南画の筆法に墨の量を加えた樹木描写は，他の山水画によくみられる。色彩は，墨を基調に，人物の肌・樹幹には岱赭，水には淡彩で青色が施される。款記蓑蟲・印章白文正方印蓑虫。

(8)楠公父子像　紙本墨画掛幅装　110.0×52.4

この図は，楠正成・正行対面の歴史画である。筆法については，背景の樹木の葉は南画の技法による。ここにも，速い運筆と簡略な筆致が認められる。正成の甲冑の草摺の一部や正行の頭髪に，側筆を用い量をきかせた描法が認められるが，これは，圓山四條派の筆法に通ずるものといえる。この筆法は，前記(1)～(4)の人物画にもわずかながら見られる。款記蓑虫山人・印章白文正方印蓑虫。

(9)白髪三千丈図　紙本淡彩額装　26.1×58.3

本図は，蓑虫が正月を祝う図である。頭には，白髪三千丈と墨書した幟をつけ，腰の後に愛用の長い煙管を置く。画面右上の襖に「新年屠蘇□汲む図」とかすかながら賛があり，この図の本来の画題と考えられる。描法は，速い筆運びによる墨線で室内や人物を形づくり，岱赭や白群の淡色で賦彩している。画面後方に続く奥座敷のとらえ方に透視法がみられる。無落款。

(10)悠々自適之図　紙本淡彩掛幅装　45.2×70.2

画面下辺に麓米南の賛[2]に「明治二十八年乙未十月中浣」とあり，本図制作もこのころと推定できる。蓑虫は，翌29年に秋田を去っているので，記念的な自画像といえよう。内容は，蓑虫が山中行脚の途次，茶ノ湯をたて休息をとっているところである。彼の背後には，生活道具一式をつめた笈が置かれ，収集した考古遺物や画材類が描かれている。蓑虫の画家であり収集家であった生き方が示されている。筆法は，(9)白髪三千丈図と同様で，背景の樹木にはやはり南画の技法がみられ，色彩は淡色である。無落款。

(11)円窓名月図　紙本淡彩掛幅装　137.3×33.2

画面構成は，月が円窓の半分からのぞきみえるという部分描写から成っている。絵を見る者が室内から月をめでるという趣向である。蓑虫の作品中，(6)高砂図と同様に，最も意匠をこらした作品である。描法においては，墨と岱赭のにじみを自然に融合させ，一気に運ばせる筆線に渇筆がでている。款記はなく，印章のみ白文正方印蓑虫。

(12)梅下小宴図　紙本淡彩掛幅装　30.5×63.4

この図は，梅の大樹の下，数人の同志が盃をかわしながら句会を行っている場面である。樹幹の描写部分に，側筆による量の色面がみられ，(8)作品と同様に，圓山四條派の技法に近いものがある。小さく描かれている人物は，南画にみられる簡略な極小点景人物の対座式の描法といえる。款記はなく，印章のみ朱文正方印蓑虫。画面左下に「人みなの粧ひ梅にとられけり□水」という句が書きそえてある。

(13)鯉の滝上り之図　紙本墨画淡彩掛幅装 170.0×92.5

この図は，動きのある対象を簡潔に描いたものである。鯉の形体は，かなり省略化された筆致ながら的確に表現されている。流れ落る水と草木及び岩のような描写には，山水風景に共通する水墨の量がみられる。款記六十六庵主人蓑蟲・印章白文正方印蓑虫。

(14)養老瀑布図　紙本墨画淡彩掛幅装　146.5×78.2

この図は，南画の楼閣山水の形式をふんだものである。その形式の中で，蓑虫の特徴的な筆法としては，やはり墨色の表現にある。滝が流れる遠くの山は，淡墨と淡彩によって霞むように描かれ，前景の山の草木

は，濃淡の階調をつけて描かれ，広大な空間をもつ山水画となっている。また，木の葉の描写にみられるにじんだ墨色により，画面は柔かな絵肌をもつ。款記蓑虫山人・印章白文方正方印蓑虫。

⒂行内瀑布図　紙本墨画淡彩掛幅装　174.5×87.9

この図は，画面右上に「行内瀑布之図」と書かれている。行内の滝は，南秋田郡井川町井内に実在する滝である。蓑虫は，井川に長く滞在した事がありこの滝を見たもの考えられる。ただ，画面は，高大な山にかこまれて流れる大滝となっている。写生図ではなく，粉本構成による南画山水である。筆法は，⒁の瀑図とほぼ同じである。款記蓑虫・印章白文正方印蓑虫。

⒃象江九十九島図　紙本墨画淡掛幅装 147.1×39.7

この図は，文化元年の地震で隆起する前の象潟を描いたものである。制作に際し，他の作品を参考にしたものと推測される。画面上辺に鳥海山を描き，その麓に広がる九十九島を配置する構成は，象潟町蚶満寺所蔵の中山高陽筆「象潟図」に似る。ただ，両作品の直接のつながりは，今のところ推測の域を出ない。描写の特色は，海水面を淡墨でおおい，島々や樹木の周囲を余白とし雪の九十九島を表したところにある。これは,隈取の方法である。款記蓑虫　印章白文正方印蓑虫。

⒄　大谷派本願寺之図　紙本着色掛幅装　87.0×92.6

この図は，東本願寺の全景をとらえた俯瞰図である。真景図に近いこの種の寺院描写は，県内でみる限りでは稀である。描き方は，他の作例にはない丹念な描き込みがされてある。このような図は，需めに応じて制作された可能性が強い。画面左上に「大谷派本願寺之図　明治二十二年九月」とある。款記六十六庵主蓑蟲山人・印章白文正方印蓑虫。

⒅農耕図　紙本淡彩六曲一双屏風　各133.5×52.0

この屏風絵は，一年を通して稲作に関わる農作業や習俗を，月次に描いた作品である。描かれている場面は，右隻第一扇から左隻の第６扇目まで次のとおりである。①年の始めの萬歳　②種浸し（俵に入れた籾を池に浸し芽出しをさせる）　③耕土　④播種　⑤田植　⑥除草と用水（踏車）　⑦虫送りと舞　⑧収穫　⑨稲干し（ほにょ）と脱穀（千歯こき）　⑩選別（唐箕）　⑪貯蔵　⑫正月を祝うための準備をしている農家の様子。

六曲屏風の本紙の体裁は，一扇ごとに切り貼りされた形である。ただし，各図のつながりをみると，背景の山はほぼ連なりを持ち，樹木は２図を対にほぼ同種のものが描かれている。筆法は，各図とも同様で，南画の様式と淡色の賦彩がみられる。

蓑虫は，明治27年南秋田郡井川町(現)の沢石家に滞在した折に本図を制作している。しかし，画中の農耕の様子が当地のものとは断定しがたい。むしろ，当地の農作業をみて触発された蓑虫が，古来からある農耕図を基本として画面構成したものと解釈するのが妥当と考える。

左隻第６扇に「明治二十七年八月」と制作年月が書かれている。款記六十六庵主蓑蟲山人　印章白文正方印蓑虫。

⒆物売之図　紙本淡彩６幅対　133.0×67.2

この図は，①花売　②金魚売　③瓢箪売　④西瓜売　⑤陶物売　⑥鉢物売　の各場面を１幅ずつにまとめたものである。筆法は速い筆の運びによる形体の描写・省略化・淡彩などが特色で全幅に共通している。画面構成は，物売りの人物だけの描写で成っている。ただ，これらの物売りがどこの地方のものかは特定できない。款記①③蓑蟲仙人　②④⑤蓑蟲山人　⑥三府七十二縣庵主人・印章各幅同じで白文正方印蓑虫。

⒇津軽富士百景　紙本墨画淡彩画帳　各 27.3×62.8

この画帳には，明治16年から同17年にかけて，蓑虫が青森県滞留中に見た風景や身辺の出来事などが収録されている。その内容は，「津軽富士百景」の書蹟が１葉・図が26葉・体験談の記述が３葉となっている。図の内容は，風景図が14葉，宴席の光景が７葉，蓑虫のいる室内の光景が３葉，懸仏と幼女の写生が２葉である。このうち風景図の中に岩木山の図と推定されるのは１葉のみである。図の収録順は，前半は西津軽郡・東津軽郡における明治17年の写生図，後半は北津軽郡小泊村における明治16年の写生図である。描写の特色は，写生図ではあるが南画の様式に則していること，色彩は淡色で，描線は柔軟である。画帳全体を通して，蓑虫の絵日記の性格をもつ。なお，画帳内の記述は，小泊村滞在中身辺に起きた事件をつづったもので，画論および考古遺物に関するものはない。

Ⅲ　まとめ

Ⅱの作品をもとに，1.画題　2.描線・色彩・様式の角度から，蓑虫の作画をまとめてみる。

1.画題

作品のモチィーフとなっていたのを大別すると次のようになる。

①風景（写生にもとずくもの）
② 〃 （粉本構成にもとずくもの）
③風俗
⑤人物（自画像の様相を呈するもの）
⑤ 〃 （群像ー宴会の風景）
⑥ 〃 （故事・歴史上の人物）

この外，昭和59年青森県立郷土館における蓑虫山人展を参考にすると，※考古遺物の模写　※仏画，管見するところによれば※鳥獣画の類がある。

風景図のうち，写生にもとずく図は，前述Ⅱであげた津軽富士百景に多く収められている。Ⅱ以外のものでは，名古屋市長母寺蔵の絵日記に秋田県内の写生風景があり，大館市十二所秦家の襖絵（男鹿八郎潟などの名所風景）など多数ある。いうまでもなく，風景は，蓑虫の重要なモティーフである事が判然としている。しかも，実際に見た風景を作品化するところには，近代画家としての性格がみられる。これに対し，粉本構成による山水風景は，Ⅱでは養老瀑布図と行内瀑布図がある。このふたつの滝は実在の滝で写生可能なのだが，蓑虫は，これらを粉本による型式的な構成をとっている。

風俗をとらえた図としては，Ⅱ項では，物売之図・農耕図があげられる。それ以外では，長母寺の絵日記には県内各地の風俗が収められている。旅にあけくれた蓑虫にとって珍しい各地の風俗が格好のモティーフになったのは当然ではあろうが，自分の目で確めたものに制作の動機をもつことが，風景の場合と同様に彼の根本の作画態度である。

次に人物図についてであるが，自画像の意味をもつ図に，Ⅱ項で述べた作品では，悠々自適之図・津軽富士百景所収の自画像があげられる。蓑虫が自己を表現する場合，笈・画材・収集品・茶道具などを描きそえる。これは，旅の画家であり考古遺物の収集家であった自分の生き方を示す明確な表現である。群像形式の人物図は，主に彼が訪問先で歓迎されている宴会の光景が多く，ここには，彼の消息を伝える絵日記の性格が看取されるだけである。故事・歴史上の人物は，Ⅱの内，鍾馗図・寒山拾得図・達磨図がある。伝統の画題をもつこれらの作品では，蓑虫の水墨の技法と変形・省略による創作性が認められる。

2.描線・色彩・様式

作品にみられる描線と色彩の特色を抽出してみよう。

描線は，柔軟性をもったやや肥瘦のある線といえる。線の動きは，よどみがなく速い。対象を形づくる線は，省略化されたもので，むしろ濃淡のある色面に比重が置かれている。これらの特色は，Ⅱ項の全作品に共通するものである。

色彩は，淡彩表現をとる。墨色と岱赭以外の色では，青色系（白群・藍）が最も多く用いられる。墨色の表現は，蓑虫の最もすぐれた技術であり，効果的な暈とにじみが，マティエールづくりの重要な位置を占めている。

様式については，蓑虫の作品は，従来から指摘されているように，南画の様式を強く帯びている。Ⅱ項の山水風景の山や樹木の筆法，画面構成など随所に南画の筆法が確認される。また，別の筆法としては，Ⅱ項の楠公父子図で述べたように，側筆による暈の表現が圓山四條派の筆法に近いものとしてあげられる。この解釈については，さらに多くの作例を見なければ明言はできないが，蓑虫が，南画以外の古典様式を研究した可能性は強い。

最後に，蓑虫の独創性を示す表現として，Ⅱ項の鍾馗図・寒山拾得図・達磨図など一連の人物図がある。これらの図にみられる大胆な省略化・蓑虫独自の解釈による人物の表情は，彼の独創性を示すものである。これは，いわば個性の表出であり，蓑虫の近代画家としての要素ともいえる。

Ⅳ　おわりにかえて

本報では，限られた数少ない作例をまとめることによって，蓑虫の作画様式と近代画家としての要素を抽出してみた。

蓑虫という画家は，おおむね古典様式にいろどられた画家と作画の多くの動機を写生に置く近代の画家というふたつの性質をもつ。この両面性を考える事はこれからの課題のひとつである。彼の活動期が，明治時代前半という過渡期である事を考慮に入れながら，同時期の地方画家との比較を試みる必要性を感じた。今後，多くの作例にあたることによって，訂正および新しい見解が生ずるものと考えられる。多かたの御叱正

をいただければありがたい。

末尾ながら，作品の調査および本報のまとめに際し多くのかたがたから，御協力・御指導をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。

（敬称略・順不同）山田福男・武塙林太郎・奈良修介皆川忠彦・柳谷直正・各作品所蔵者・比内町教育委員会・二ッ井町教育委員会・井川町歴史民俗資料館・大沢資料館・磯村朝次郎・藤原茂・仙波昭彦・嶋田忠一・庄内昭男。

註

1）蓑虫山人は，天保７年１月３日美濃国安八郡結村（岐阜県安八郡安八町）に生まれる。本名土岐源吾。土岐家は中世守護大名の祖先をもつ名門と伝えられる。10歳代の半ばに旅の生活に入る。九州で日高鐵翁に師事したという伝がある。明治11年ごろ秋田県雄勝郡を通過して岩手県に入る。これ以後明治29年正月まで東北に長く滞在する。画業の外，考古遺物の収集に力を入れ，明治20年の亀ヶ岡遺跡を発掘し，神田孝平によって紹介されている。秋田県内においても，考古遺物の調査をしている。彼には，全国の遺物を集め，将来博物館を建てようという構想があったが，実現はしなかった。秋田県内での足跡は，県北鹿角から県南は雄勝までみられる。とくに北秋田郡比内町を拠点にしているため，同町には最も多くの遺品がある。明治33年名古屋市長母寺にて，65歳の生涯を終える。法名蓑虫庵遍照源吾居士。雅号は，蓑虫の外，六十六庵主人・三府七十二縣庵主人などである。

2）麓米南は，北秋田郡比内町（旧扇田村）の人で，蓑虫が県内では最も世話になった人物である。笈乃記は，蓑虫の経歴を知る上で，信憑性の高い史料といえるので，次に全文を掲げる。

蓑虫仙人笈之記

仙人姓土岐名源吾美濃の」産なり少壮の頃早く俗」塵のいむへきを観し蓑蟲」と號して山間に入る世人稱」して仙人となす爾来四十」有六年の間あまねく天」下を周遊し六十六洲足」跡到らさる所なしといふ仙」人博識にして画を善くし」常に風流韻士と交る當」国に遊ふこと前後ここに三」回当年恰も六十歳環暦」にあたれりとて笈を拾て自」画俏像一幅を添ひ以て小林山徳栄寺に納めて去る蓋し」今世の業終ひたるの意なりと抑」も仙人の山野を抜渉するや」常に此笈をはなたす中にを」さむる所のもの利休居士の所謂」茶飯釜一あるのみ到る所の山」川風月意に合すれば即ち之を」開きて屋となし自適悠々あ」くことをしらつと予仙人と交り」厚し故に聊か其略傳を録」して笈之記となす

明治二十八年乙未十月中院(浣)　麓米南識

参考文献

秋田市美術館　蓑虫山人展パンフレット　昭和36

高橋哲華　蓑虫山人　昭和42年　洋々社

比内町文化財保護調査委員会　比内町文化財目録第４号　昭和46年

山田福男　蓑虫山人と鹿角　鹿角市文化財保護協会編上津野No.３所収　昭和53年

石垣忠吉・千葉三郎　蓑虫山人全国周遊絵日記ー秋田編ー　ＤＩフォト企画（撮影山田福男）昭和54年

— 図 —

図に付した数字は，Ⅱ項の作品番号と符合する。

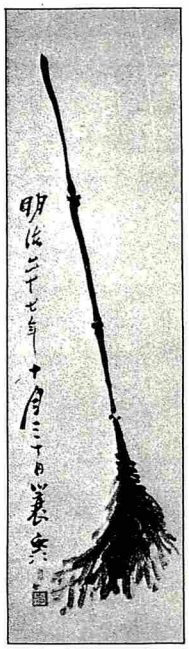
(1) 寒山拾得図

(2) 寒山拾得図

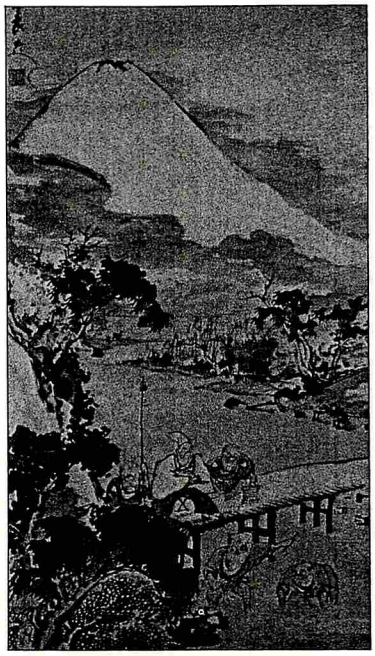
(3) 鍾馗図

(4) 達磨図

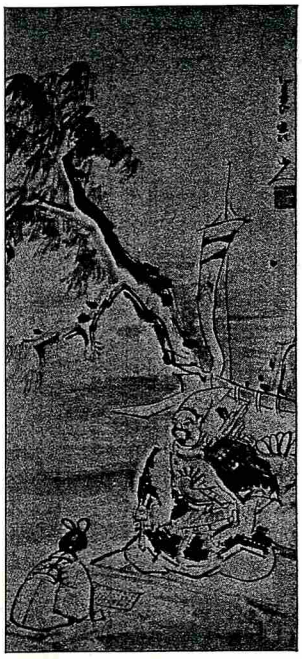
(5) 百老之図



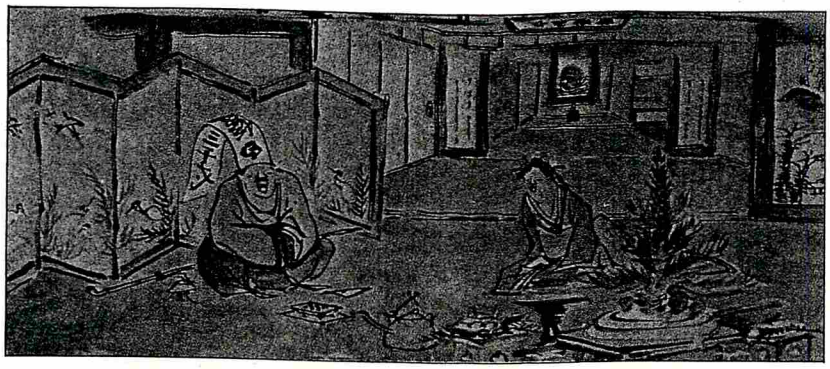
(6) 高砂図



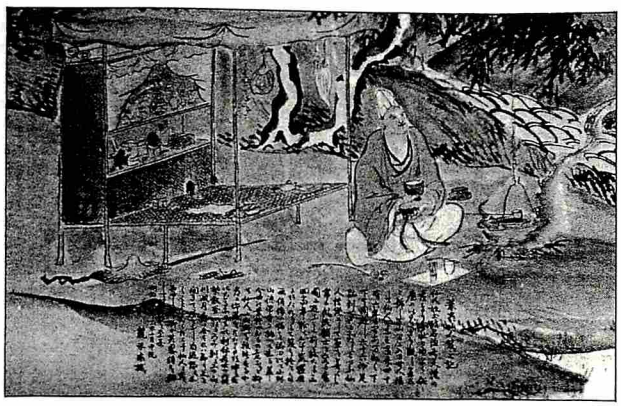
(7) 青砥藤綱銭拾い之図



(8) 楠公父子像

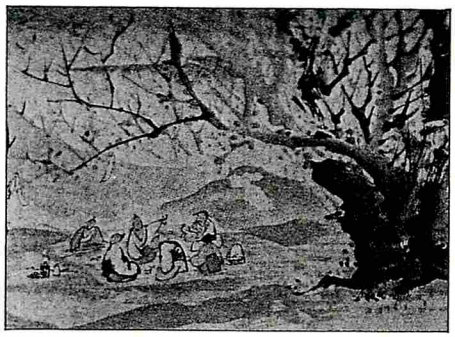


(9) 白髪三千丈図



(10) 悠々自適之図

(11) 円窓名月図

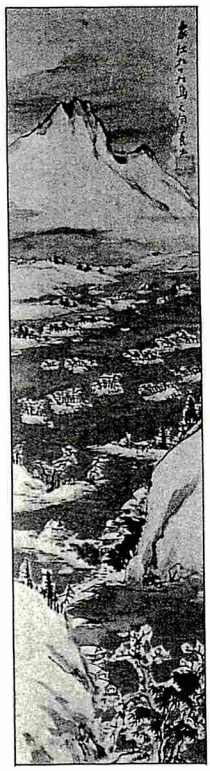


(12) 梅下小宴図（部分）

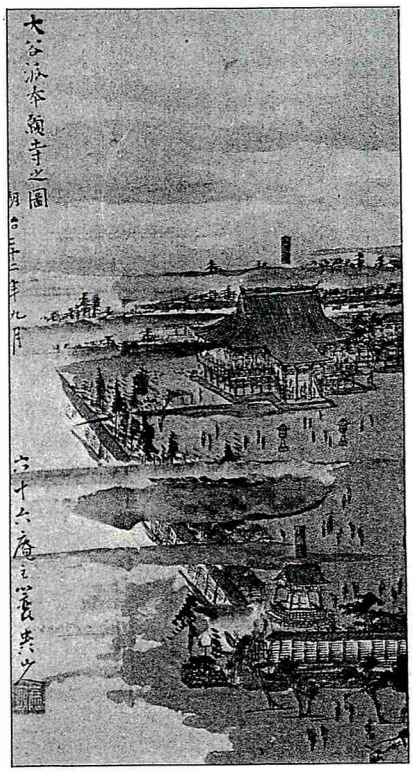
(13) 鯉の滝上り之図

(14) 養老瀑布之図

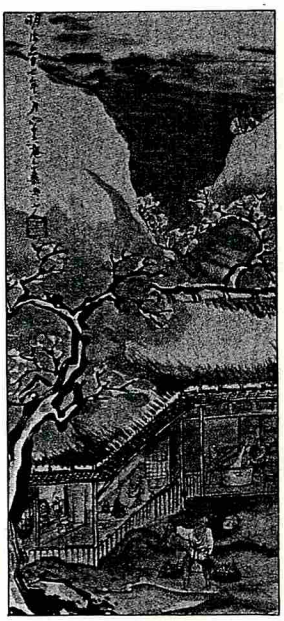
(15) 行内瀑布図



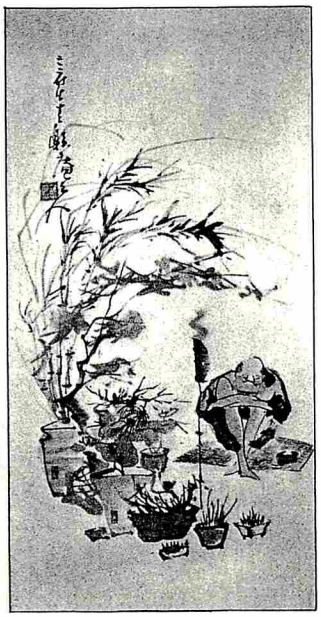
(16) 象江九十九島図



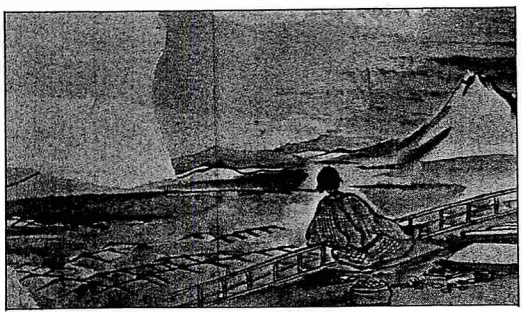
(17) 大谷派本願寺之図（部分）



(18) 農耕図（部分）



(19) 物売之図（部分）



(20) 富嶽百景（部分）